

生きて働く国語の力の育成

—「読めた」「使えた」が自覚できる単元構想と授業づくりを通して—

磐梯町立磐梯第二小学校 教諭 小林 亜希

1 研究の趣旨

国語科の説明的文章の授業において、単元の学びを日常生活の中で活用する具体案をもち、その具体化に向けて動き出したH男。「自ら動き出す姿勢」の醸成を方針として打ち出している本校にとって、このような姿を大切に授業改善に励むことが使命であると考え、本研究をスタートさせた。

そのような中、令和3年度全国学力・学習状況調査の児童質問紙調査において、本校は「国語の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つ」の調査項目において改善の余地があることが分かった。その原因を校内で話し合ったところ、「読むこと」の指導において教師の指示のもと内容理解を重視する傾向にあったことと、活用までトータルで構想した単元の中で子どもたちが主体的に学ぶといった活動が十分でなかったことが課題として挙げられた。

そこで、「どのように学ぶか」を重視して授業を改善することを通して、子どもたちに学んだことの有用感をもたせながら、日常生活に必要な「生きて働く国語の力」を育てていくことが喫緊の課題であると考え、本主題を設定した。

2 研究の概要

国語科における文学的文章や説明的文章の指導において、終末の活用場面を明確にした単元構想の中で、主体的・対話的で深い学びを実現するため、以下の視点で授業づくりの工夫を行えば、単元を通して子どもは「読めた」「使えた」を自覚し、生きて働く国語の力が育成されるであろう。

【視点1】課題意識のもたせ方の工夫

【視点2】よりよい対話の在り方

【視点3】新たな学びにつながる終末の工夫

上記の研究仮説のもと、「終末の活用場面を明確にした単元構想」と「『主体的・対話的で深い学び』を実現する授業づくり【視点1～3】」を研究内容とし、全学級で研究授業を行い、検証した。

(1) 研究授業1 4年「一つの花」(光村図書)

単元終末には子どもたちそれぞれが並行して読む関連図書について、その題名がつけられた理由を中心に紹介し合う「読書発表会」を行うこととして、授業づくりの工夫を行った。

(2) 研究授業2 1年「くじらぐも」(光村図書)

学習発表会「生き生きフェスティバル」において、「くじらぐも」の音読劇を発表することとして、授業づくりの工夫を行った。

(3) 研究授業3 6年「『鳥獣戯画』を読む」(光村図書)

「『鳥獣戯画』を読む」を全体で読み進めた後、子どもたち各自が関心をもった日本文化について調べ、それをパンフレットにまとめることとして、授業づくりの工夫を行った。

(4) 研究授業4 2年「馬のおもちゃの作り方」(光村図書)

単元終末に1年生のためにおもちゃづくりのオリジナル説明書を書き、それを発表することとして、授業づくりの工夫を行った。

3 成果と今後の課題

(1) 研究の成果

○ 単元終末の活用場面を想定しながら単位時間の位置付けを明確にしたことで、教師はもちろん、子どもも毎時間の授業に臨む目的意識が明確になった。そして、子どもたちが自ら問いを見出すことができるようになり、主体性が高まった。

○ 「国語の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つ」と捉える児童が増えた。授業で学んだことを卒業文集や学校文集に生かしたり、算数の時間の計算の説明で生かしたりする子どもの姿が見られた。そして、教師はそのような姿を見た時に欠かさず国語の学びの話題を出して称賛した。こうした、教師・子ども双方の意識の向上が学校全体として出てきていた。

(2) 今後の課題

○ 単元終末に活用を位置付けることの重要性は確認できたが、子どもに示すタイミングはさらに検討の余地がある。また、活用方法に関して間口の広い研究となっていたので、今後は他作品理解に焦点化するなどの工夫をしていきたい。

○ 授業づくりに関しては、コーディネートや板書について、共同研究の強みを生かしてこれからも多くの実践を行い、効果のあった手立てを形として残しながら、教職員それぞれの引き出しを増やしていきたい。

